



第8回

奇跡の一本松 再生へ、みんなの力を一はかた夢松原の会が募金活動

平成24（2012）年11月

「奇跡の一本松」と呼ばれる樹齢200年を超える松が、岩手県・陸前高田の高田松原にある。東日本大震災の大津波に7万本と言われた高田松原が流される中、ただ一本だけ奇跡的に生き残った。正確には「生き残っていた」と言うべきかもしれない。間もなく、潮水が根を浸し、枯死したことが分かった。

明治29年、昭和8年の三陸大津波、昭和35年のチリ地震津波にも耐えてきた松だった。津波をかぶった松原、市街地、田畑は荒野のごとく、その中で1本だけ、大空に向かって雄々しく立つ「1本松」は、人々が津波の被災にも負けず立ち上がるよう励ましているかのようで、復興のシンボルともなっていた。

しかし、その一本松は9月12日切り倒された。幹にはカミキリムシなどの幼虫が食べた穴が無数にあり、樹皮もボロボロ。力尽きての枯死だった。防虫・防腐処理をして、保存、復興シンボルとして現地に再現するのだという。勿論、生きた松ではない。

高田松原を守る会の鈴木善久会長は「切られるときは、わが身に鋸を入れられるようにつらかった」と目を潤ませた。保存再現には1億5000万円もかかるという。「保存はうれしいが、そんなにお金がかかるのなら、他の復興に役立てることができないものかとも思いました」と鈴木さんはつぶやいた。

鈴木さんたちが考えている「再生」は、一本松の松かさの種を発芽させ、高田松原全体を再生させること。

再生の手本として考えているのは、はかた夢松原の会の活動だ。今から25年前、はかた夢松原の川口道子さん（91）たちは、博多っ子の「原風景」ともいべき百道浜が埋め立てによって消えていく運命にあった時、新しい百道浜と松原を創り出そうと活動を始めた。募金運動として「株券」を販売（千円）、「配当」は松ぼっくり。大きな反響を呼び、現在の福岡ドーム、福岡タワー沿いの海岸に松を植え始めた。最初の植樹は4本だったが、今は4万本を越えて、市民の憩いの浜辺となっている。

はかた夢松原は、高田松原の再生のための募金を呼びかけている。松は栄養の少ない荒れた土地に育つ。砂の中に芽を出し、育ち、長寿を保つ。響灘—玄界灘の海岸の松原は、一時は滅びつつあったが、はかた夢松原の会の活動が刺激になって、各地で「松原を守る」活動が展開され、現在では多くの松原が「再生」している。玄界灘風景街道の売り物の景観は「白砂青松」のつながりだ。

夢松原の松の種が、遠く陸前高田の松原に飛び、高田の松原を蘇らせること、それは「博多っ子」みんなの願いとなっている。

高田松原再生の募金活動の（問い合わせ先）

「はかた夢松原の会」

福岡市中央区大名1丁目2-15、坂田ビル4階。電話092-406-2369

玉川 孝道（西日本新聞元副社長）

夢アイデア審査委員長（平成22年～令和2年）